

古平の歴史

発行・古平町
文化会館 42-2590
第180号
16-9-1

年表で読む

古平の歴史

《86》

産物のひとつでもあつた。当時は長崎に送り、そこから清国（中国）へ輸出され、幕府にとつて海外貿易の大きな収入となつていた。

源となつていた。

今から二百数十年前の元文年間に幕府は松前藩に命じて、

イリコ（海参・煎海鼠）を煮て干したもの）を長崎に

移出させた。その量は年によつて大分差があつたが、四七五本から三一六本（一本六〇吉入）ほどであつた。

明和二年（1765）には、「手塩（天塩）で、恵比須屋岡田の外、近江商人の西川、小西などが明和五年（1768）から安永四年（1775）まで、イリコの共同経営をしていた」

文化七年（1800）幕府は、海鼠引稼方場所、人數を次のように定めている。

一、海鼠引稼方場所、人數

一、スツ、ヲタスツ、イソ

ヤ シャコタン ヒクニ

フルヒラ アツタ
メ 壱場所式人つゝ

イリコ三九〇本の内、

「エチゼンハシ

貫一百文ずつ取り立て、一人

右の人数だけは役錢（雑税）

を免除し、一人ずつに切手（こ

とでは手形）を渡すことにして

る。もしこの人数より多く来たときは、一人につき役錢として

貫一百文ずつ取り立て、一人

ずつに切手を渡す。

■明治以後のナマコ漁

■「海のキウリ」
ナマコの先祖は、われわれ人類の先祖より二百倍以上の昔から地球上に生きていて、その種類も約一、一〇〇種が知られている。人がナマコを食用にしたのはいつ頃なのか、貝や魚であれば貝殻や骨が残っているが、ナマコの体にははつきり骨とわかるものが無いので証拠は無いが、中国料理では昔から高級食材として珍重されてきた。

ナマコの「ナマ」は生で食べるという意味で、「ゴ」は蠕形（ぞく、蠕うごめく・はう）をしている動物の意味である。

漢字で海鼠と書くのは、多くたが、松前藩時代には古平の主

性）習性から、ネズミ（鼠）に似ているということによる。
英語ではシー・キューカンバーで「海のキウリ」、全くそのものズバリの名前である。

ナマコはほとんどの種類が雄雌があるが、外観からは全く区別がつかない。卵からかえると数回は変態して一人前になる。

古平で獲れるナマコはマナマコ・キンコだが、キンコは数少ない雌雄同体である。

実際に古平ではどのくらいのイリコが生産されていたのか、寛保元年（1741）、長崎へ送った

■ナマコ漁の始まり

現在は古平でのナマコ漁はごくわずかなものになってしまった

たが、松前藩時代には古平の主である。（岡田家の船印が）

このように、箸を一膳並べたよ

うな形をしているので、通称工チゼンバン・エチゼンハシと呼ばれていた）すでにこの頃、ナマコを採取し製造していたと考えられる。

明治一八年(一八八五)の統計では、古平の海鼠引き網二十三とあるが次第に減少する傾向についた。日清・日露戦争でイリコの輸出が一時途絶え、その製造業者も少なくなつた。

明治四三年、小樽港から輸出されたイリコは一二〇〇斤(約七二〇吉)で、価格は七八〇円であった。

大正元年には、次のように採取、製造していた。

■コウナゴ漁魚には地方の呼び名が多いがコウナゴの本名はイカナゴで、漢字では鮒子・玉筋魚などと書く。小さいときはシラウオ・コナゴ、大きくなるとオオナゴ・ナガウオ・メロウド・メロ、その外カマスゴなどがある。

■タナゴ網でコウナゴ漁

五月初旬に獲れるコウナゴはて来る。寿命は南方系が短くて二三年、北方系は六年以上だ

という。砂に潜っている。積丹半島周辺では三歳魚が中心で産卵にやつて来る。寿命は南方系が短くて二三年、北方系は六年以上だ

漁具	乗組	磯舟	漁期	漁獲高	製品海参
八尺	一人	一〇隻	六月初	四八〇〇貫	
	一人	四隻	八月末	七二〇円	
突				六四〇貫	
				九九円	八七五円

明治四三年、小樽港から輸出されたイリコは一二〇〇斤(約七二〇吉)で、価格は七八〇円であった。

大正元年には、次のように採取、製造していた。

明治四三年、小樽港から輸出されたイリコは一二〇〇斤(約七二〇吉)で、価格は七八〇円であった。

大正元年には、次のように採取、製造していた。

明治四五年の漁獲高(五月末から六月一〇日まで操業)

には角網一一か統・たも網は保津船(ほせん)や磯舟、川崎船などのできない貴重な食材だが、内臓もまた珍重されている。

■珍味としてのナマコ
イリコは中国料理に欠くことのできない貴重な食材だが、内臓もまた珍重されている。

腸といわれる消化管は、外から体を刺激されると肛門から放出するが、この腸はやがて容易に再生するという特徴がある。

内臓を塩辛にした腸を「このわた」、生殖腺を「このと」といって、中国では金と同じ目方で取り引きされたという。

■船引き網で好成績
大正九年、鮭大謀に来ていた寿都の漁夫から、コウナゴ漁に船引き網が有望であることを聞

き、入船町の竹本清次郎・山口正治・蓑目八三らが寿都から船引き網を購入し、許可を得て操業したところ好成績であった。

煮干しにしたコウナゴは、呉服箱やタバコの空き箱を利用するようになつた。

一般にコウナゴ漁は副業とみられていたようだ。昭和の中頃から薰製や養殖の餌料としてのオオナゴの需要が増え、巻き網や敷き網(棒受け網)で大量に漁獲されるようになつた。

■その後のコウナゴ漁
また、コウナゴの製品は煮干しやつくだ煮のほか、塩蔵した汁から作ったイカナゴ醤油という讃岐の名産もある。

角網 たも網	漁の種類	生 売 り	自 家 用	計
二二六〇〇貫 一、八九〇円	三三三貫 六七円	二二九三六貫 一、九五七円	八二二五貫 一、二二九円	
二二六〇〇貫 一、八九〇円	三三三貫 六七円	二二九三六貫 一、九五七円	八二二五貫 一、二二九円	
一、二二九円				

<3>

せ た か む い

	同じ時期	計
大正九年	一一一、七〇〇石	一一一、七〇〇石
同一〇年	一九五〇〇石	一九五〇〇石
同一年	二〇〇石	二〇〇石
▼三月三〇日		
起床七時。熊さんは五時頃に早やモッコしよいに出た。板戸を開け、浜へ出て漁況を見る。沢江、沖村方面は漁獲皆無。丸山岬から群来村にかけては大漁。ア種田三〇杯、外も一〇杯、一〇杯くらい。全部で二、四〇〇〇		

▼三月一九日
起床七時。今朝さらに鯨漁は無し。浜はさびしいことだ。店はヒマになつたので、賛字、作文の本などを見る。小樽新聞の鯨漁(八日調べ)によると、積丹、余市、古平、忍路、高嶋、益樽、増毛、小浜、計一〇、一一一、七〇〇石。

石獲れたとのことだ。熊さんは種田へモッコしよいに行く。方々から鯨を貰い、一モッコ以上本などを見る。小樽新聞の鯨漁(八日調べ)によると、積丹、余市、古平、忍路、高嶋、益樽、増毛、小浜、計一〇、一一一、七〇〇石。

▼四月一日
早や四月になつた。鯨漁は種田一四、五杯を筆頭に入船町方面が少し漁がある。正印歩方の六、七杯は上等の方だ。歌棄山中、例年は千石場所だが△、△、○、凶等は一向に獲れぬ。刺網も不漁だ。この口風が強く、九時頃三人で来て、六〇〇間の刺網を持つて帰つた。鯨漁が途切れ、町の人気も今ひとつだ。投網中の刺網、この時代でどうなつたのかと案じている。アバ繩も七、八丸出た。夕方浜へ出で見ると、風波もだんだんおさまってきたようなので、今夜こそは大漁があるだろう。

▼四月三日
起床六時、この頃一番の早起きだ。熊さんは港町平で買い鯨をしたというので手伝いに行く。私は板戸を開けた。店は閑散、実業講義録の商業・作文などを見る。得るところが大きい。ある。九時頃、悦三と浜へ出て見る。まだかなりの波だ。昨夜はさらに漁はなし。漁業家をはじめ一般も鶴首して待つてゐるのだ。今日のところ錢函・朝里辺

帰る。
▼三月三一日
鯨も建網は皆無。刺網は一部に厚く来たので、大掛かりのところもある。網数が不足で四五本ぐらいのもの。沢江、江、里、錢函、張碓方面で大漁。五月は火災の最も危険な時期だ。新聞によれば三〇日、朝新聞によれば、朝里、錢函、張碓方面は二〇数年来の大漁とのことだ。古宇、岩内は皆無と實に皮肉なことだ。

▼四月二日
部落を受け持ち歩く。鯨場で、畠方面や奥の方からずいぶん出て来ている人達がいる。親達が仕事に來ていて、子供達が留守をしているところが多く、四、五〇本も揚げたとのことでこれは例外だ。新聞によれば三〇日、朝里、錢函、張碓方面で大漁。五月は火災の最も危険な時期だ。新聞によれば、朝里、錢函、張碓方面は二〇数年来の大漁とのことだ。古宇、岩内は皆無と實に皮肉なことだ。

高野名幸作さんのかづから

[81]

時から火災予防巡視をする。旭

起
床六時、この頃一番の早起

きだ。熊さんは港町平で買
い鯨をしたというので手伝いに行
く。私は板戸を開けた。店は閑
散、実業講義録の商業・作文な
どを見る。得るところが大きい。
ある。九時頃、悦三と浜へ出て見
る。まだかなりの波だ。昨夜はさ
らに漁はなし。漁業家をはじめ
一般も鶴首して待つてゐるの
だ。今日のところ錢函・朝里辺

りが大漁のみだ。樽新（小樽新聞）記載、「田里（パリ）滯在中の北白川宮成久殿下、同妃房子内親王および朝香宮も重傷、巴里来遊中の北白川宮成久殿下には、ベルギー付近で自動車が樹林に衝突したものである。また、二日午前三時、俱知安で火災があり、三〇余戸が焼失、四人が焼死したという。世の中はどこに災難があるかわからぬ。實に気の毒だ。▼四月四日

昨夜一時頃から雨が降り、のち雪になつた。朝起きて見ると一面の銀世界、一寸以上も積もつてゐる。この寒さの中、沖で一夜を明かす漁夫もなかなかゆるくない。浜に出て見たが、期待した浜中方面は一向ない。丸山岬から群来村にかけて「△種田などは一五六杯以下、他も相当獲つたとのこと。本年は丸山岬から群来村方面ばかりが良い。歌棄山中も一向ない。△種田などは早や五〇〇石以上も獲つたとのこと。吉治は学校から帰ると父と△の浜へ行く。

▼四月五日 鯨漁無し、海は時化、寒さも厳

しく雪もチラチラ降る。午後一時新地の銀行へ行く。帰途、△中の北白川宮成久殿下に寄り風呂をもらう。夜、困支店で部落会の会合がある。思えば昨年の今日、△七で会合をしていたら、鯨模様があるというので大騒ぎ、本年も大漁してほしいものだ。一〇時に帰る。まだ浜の方では波の音が高い。かねて出願していた古平浜町局の電信受けの件、通信省から許可が下りる。七、八月ころには開始される由、これで便利になる。▼四月六日

就寝中の四時頃から、畑方面からガヤガヤ人通りが騒がしい。今日は大漁ならんと板戸を開けて見て見る。今朝早くから群来て、刺網連中は網を積んで出るのか、浜は火事場のようだ。騒ぎだ。いよいよ浜中から沢江方面が活氣づく。○△囚などは一桿宛て、外_△、△なども一五、六杯獲る。刺網も上は四〇本くらいから下は一〇本くらいまで、ほとんどの刺網で獲れた。九時頃、入船町の種田から並二〇〇丸、細四〇〇丸注文す。▼四月七日

丸山岬から群来村方面、歌棄沖村方面が大漁、約四〇〇〇〇石の漁獲、刺網はほとんど皆無とのこと。沖揚げをしていたら一〇時頃から時化になり、中止して港内に避難した。午後、種田から八分ロープ一丸注文がある。夜の一〇時頃から風が激しくなり、家に居ても恐ろしい程だ。朝の六時頃、群来村で土砂崩れがあり、白岩では子供三人が死亡したとのこと。大惨事であり、実際に氣の毒なことだ。△ヘアバ繩並二〇〇丸、細四〇〇丸注文す。

は△、種田へモッコしよい。今日で三日出る。町中は今日の漁で一度に人気が引き立つ。新聞によれば、北白川宮成久殿下も危篤とのことで、攝政宮殿下の台湾への行啓も延期されたとのこと。

稀なことだ。特に午前二時から五時頃までは家に居ても恐ろしい程だ。もしや火事でもあつたら大変だと起きていた。港内には桟船一〇数隻が停泊している。救助に行つた浜から見ている。救助に行つたが、人命には異状が無かつたようだ。時化で桟を四つ程も投げたたとのこと。九時から火防組合で巡回する。新開町では屋根を取られた家もある。一時頃、種金から八分ロープ一丸注文があり届ける。港内では川崎船で八尺を引いている。風も午後から静かになつた。

▼四月一〇日 鯨漁無し。新聞を見れば各地とも、昨日來の暴風雪被害が甚だしい。岩内、古宇の如き、さらには鯨漁の無いところが、漁具を流されたり破損したり、漁夫も五、六人溺死したという。余市八日に大漁した後、時化で一万石余りも流失したとのこと。全

道一帯の暴風であった。吉平では港内の桟一三よりこわれたのがなく、人命にも別状が無く、まだ幸運のほうだったとななければならぬ。佐渡^{サトウ}その他五軒へ着到り、東へ向かひ、船を下す。

天気もようやく快晴になつた。今朝は鯨漁さらに無し。今まで内、北、東、西の魚

か。刺網と歩方連は不漁なので、
実に景気が悪い。この分だと町
内全般が困る。熊さんは朝早く
から出て夕方戻って来てから
聞いたところ、○（零）いちでは
時化前の鮒を沖揚げしたのこ
とだ。町中の雪は大分消えたが、
空き地などではまだ雪があり、
道路も悪い。

鰯大漁後に大時化になり、損害も甚大の惨状を呈した。昨夜一二時頃から○一では代わり松が行き、モッコしよいを頼むといつてきだ。これは万歳いよいよ大漁だと大喜びだ。六時起床、浜に出て見る。歌葉山中は大漁入り、命中、○一、「△」種田、種金、△全、崎長は一枢ぐらいうつ、刺網も掛かり、枢引きも眠

○一、コノさんは勿へ行く。午前一時頃からにわかに暴風となり、波も高くなり大騒ぎ。港内へ梓を引いて来るがなかなかゆるくないようだ。川崎船、発動機船、古巣丸などが引いているが、そのうち入キの沖で水船になるのもあり、冲合いで遭難するもの、梓を投げるものなどで大変な騒ぎになる。朝の大漁の、喜びも一転して一大騒動になつた。船の破損したもの、梓の沈めたもの、刺網の流したものなどある。困つたことになつた。

の棒を投げるものなどて大騒ぎになる。朝の大漁の、喜びも一転して一大騒動になつた。船の破損したもの、棒の沈めたもの、刺網の流したものなどある。困つたことになつた。

喜んでばかりもいられない。午後四時頃から、風も波も少しうさまってきたようだ。

▼四月一五日

人という人が出て鮓を拾つてい
る。熊さん、コノさんも行つたが
一〇モツコ程も拾つて來た。文
治や幸治も行つたが、ズボンを
すつかりぬらして帰つて來た。
未明から出かけて行つて一〇本
程も拾つた人も多いといふ。本
支店に來ていたリンゴの枝切り
職人を農園にも頼む。見ていて
得るところがある。店は時化後
の支度で、アバ繩、綿糸などの売
れ行きで忙しい。新聞によれば、
余市、岩内、磯谷、歌葉、美國
方面でも、大時化による損害が

▼四月一五日
投網したようだ。
大荒れもおさまってようやく
快晴。今日は珍しく静かで暖か
い日だ。鯫漁は丸山岬から群来
村にかけてまた大漁。種金「八
」などはまた獲った。崎長も一桿
獲つたとのこと。種田では、
本日までに一か統で一四〇〇石
も獲つたというので、大漁旗を
上げ、大漁祝いの手ぬぐいが出
る。本年は入船町から群来村に
かけてが大漁。浜中前浜、沢江方
面は薄漁で困る。妻とコノさん
は拾い鯫つぶしをやる。この夜
はとても静かで、鯫の獲れそう
な晩だ。

※【八尺】はしそく　「桁網(けあみ)」
鉄の爪がついた鉄製の枠に袋状
の網がついていて、それを船で
引いてホタテやホッキ貝などを
採取する漁具。鉄枠の幅が大体
八尺(二・四メートル)ぐらいある
のでこの名がある。

秘密の部屋

大澤文子

例年なく猛暑がつづき真紅

系統の強烈な花々が炎天下に燃える。

常に夏バテ状態になる私も、今年は何に逆らうのかベンをもつ日々の多いこと。

ふと…なつかしい思い出のひとつ。

丘道に芒のあか穂があるなしの風にそよぎ、夏の終わりを告げる頃だったと思う。

その頃、大学の教授をしていた姉に招かれ九州へ出かけたことがあった。

「魅力的なT女史の講演会があるから来ないか?」

とのこと。彼の有名なT女史と生き、一も二もなく賛成、しばらくぶりで姉と肩を並べ、いそいそとT女史の講演会に出かけたものだった。

会場の入口脇には、演題『女性の魅力』と大きく書かれた幟が風にはためいていた。

それだけで私の気持ちは興味津々、身をのり出す思いで急ぎ

姉と前の席に陣取った。

小柄なT女史は、うす紺色のシックな出で立ち。

開口一番、片手を高くかさし、「みなさん! 女性の心の中に

は、四つの部屋がありますよ、ご存じ?」

「先ず一つめの部屋は、愛、そして、誠、勇気、あとの一つは

ネエ、秘密の部屋である…」

と、力づよい一言。時の経つのも忘れ、私の頭の中にたたきこんだいくつかの事項、今でも忘れる事はない。

最後の「秘密」の部屋には、たとえ夫であろうとも絶対に足を踏み入れることはできない。

本人だけの大重要な秘密の部屋である…と。

なるほど! 心の中でそっと腕をこまねいた。

白髪である夫は紺の背広に真っ赤な不クタイ、妻は同じ紺で

るまい。秘密の一つや二つ、心の奥底にもたない女性なんて恐くないであろう。

一時間半にも及ぶ講演会をきいて、何かしら心の奥底に、小さな勇気の渦がふつふつとわきあがりくるのも否めない事実で

あがりくるのも否めない事実であろう。

身じろぎもせず聞いていた姉と、思い思いの感情をもつた顔を見合わせ、小さく息づいたものだった。

「秘密」の部屋のメモ帳に、こつそりメモした事項も楽しい。

でも時にはメモ帳の一ページをそつと引きちぎり夫に手渡す。

一瞬、驚きと戸惑いの眼差しをむける顔! 顔。ながい人生において、時にはピエロになることもある「女性の魅力」として大切な秘法といえよう。

また、世上いろいろと言われる老化防止の処方箋のことよりも、「こころの若さ」を保つことが最大の処方箋ではなかろうか。

ある記者がフランス地中海沿岸のカンヌ、ニース、モンテカルロなどに集まる老人の服装に驚き、そのことを書いていた

「秘密」の部屋を大切に培うな

ので興味深く読んだことがあつた。ある食堂で出会った老夫婦

の、端麗でオシャレな姿に舌を

またという。

白髪である夫は紺の背広に真っ赤な不クタイ、妻は同じ紺で

あつたが色つきのオシャレなメフを横に結び、胸にはコサージュが光り輝いていたという。

外面に出ている顔と首の皺は、メガネとネッカチーフできれいにかくされ、どこにも老齢さがなく、磨かれた年齢の優雅さはたとえようもない美しさに見えたという。

そのオシャレこそ「こころの若さ」ではなかろうか――。

「その年でみつともない!」「一年がいもなく!」

という言葉がわれわれの口からもれることもある。生活の感覚の違い、といえばそれまでだが、お色氣も香氣もなくなつたら「人生おしまい」と、肝に銘すべきではないか…。

やがて猛暑も過ぎ、爽やかな秋もかけ足でやってくるであろう。

ある「秘密の部屋」を大いに楽しく活用し、最大の「処方箋」とじ

「こころの若さ」「こころのオシャレ」に徹することが、最大の「女性の魅力」となるう

中連 戰

泣き笑いの体験記 戰後

吉野慶一郎

後連 戰

て見ていきました。

「フジヤマ、サクラ、ゲイシや、日本美しい！」と大声を上げて、日本通ぶりを發揮する兵士もいました。日本髪、帯、振り袖姿の美人を見ると、みんなゲイシャと思い違いしているのもご愛敬でした。

芸達者でほがらかなソ連兵たち。今回の演奏会でもソ連兵の飛び入り参加がありましたが、今回はあらかじめ予定したが、今回もあらかじめ予定した。これで、あの親切だったソ連将校へのプレゼントもできたという思いで安堵し、晴れやかな気分で次のプログラムへと進みました。

連兵も笑顔で拍手をしていました。これで、あの親切だったソ連将校へのプレゼントもできたという思いで安堵し、晴れやかな気分で次のプログラムへと進みました。

また、歌の方では「別れのブルース」「影を慕えて」など、きれいな日本語で歌ったのにはただただ驚くばかりでした。音楽好きのソ連人らしく、中には芸能人もいたのではないかと思いました。会場からも惜しみない拍手の連続でした。

さて、いよいよ今度はこちらの番です。猛練習をしてきたロシヤの歌と曲の発表です。

ロシヤの歌や民謡は歴史が古く、数々の名曲があります。帝政ロシヤ時代の圧制にも民衆は耐え、ささやかな希望と小さな幸せを夢見て、その思いを込め愁いの歌や曲が今に受け継がれているそうです。

(続)



←ソ連の音楽には欠かせない民族楽器バラライカの演奏

友好ムード　まぶゆい照明の溢れる中　の下、幾分緊張のみの全員が勢ぞろいしたところで幕が上りました。この時とばかりに、女性団員は和服に洋服にと華やかに着飾り、男性も負けじと真っ赤なネットカチーフなどをして気分を一新、これには観客もあつと驚いたようだ、会場いっぱいの拍手と大歓声が沸き上りました。

開幕と共に会場の盛り上がり始めたところで、予定通りソ連国家の演奏です。突然の自國国歌の演奏にソ連兵達は驚きながらも姿勢を正し、中には齊唱する兵士の姿も見られました。

演奏は莊重な出だしでしたが会場の雰囲気に押されたのか、次第にトランペットが張り切り過ぎたようで、なんかオリンピ

熱狂と興奮の観客　歌・踊り・演奏その度に拍手が沸き上がりもう全くの興奮状態でした。

特に今回、師匠について稽古を積んだ日本舞踊の『藤娘』や『野崎詣り』などの衣装と舞いの華やかさにはソ連兵ももうビックリ、それこそ目を丸くし

していったのか楽器まで用意して来ました。

ソ連特有のバラライカで、三

角形をした、ちょうどギターとマンドリンを合わせたような三弦の楽器です。ピックを使わな

いで右手の指全部を使う、複雑で高度な技術を要する珍しい楽器で、その妙技を披露してくれました。

また、歌の方では「別れのブルース」「影を慕えて」など、きれいな日本語で歌ったのにはただただ驚くばかりでした。音楽好きのソ連人らしく、中には芸能人もいたのではないかと思いました。会場からも惜しみない拍手の連続でした。

さて、いよいよ今度はこちらの番です。猛練習をしてきたロシヤの歌と曲の発表です。

ロシヤの歌や民謡は歴史が古く、数々の名曲があります。帝政ロシヤ時代の圧制にも民衆は耐え、ささやかな希望と小さな

幸せを夢見て、その思いを込め愁いの歌や曲が今に受け継がれているそうです。

松前藩時代

新しく松前と名乗り、蝦夷地の支配者となつた蛎崎氏の生い立ちについてはよく分りますが、先のアイヌとの戦いで、東は鶴川から西は余市までも広がつていた和人が、アイヌによつて上の国周辺まで追い詰められて危うくなりました。

その時 館主であつた蛎崎氏に寄寓していた縁者の武田信広が、進んでただ一つ残つた上ノ国の館に立てこもつて戦い、和人が蝦夷が島から迫われるという危機を救つたのでした。その手柄によつて蛎崎家を継ぎ、次第に勢力を持つようになつたというのが、蛎崎氏の経歴でした。

しかし、信広の出生のことも、コシャマインの乱についても記録はあるものの、信頼できる確実な資料の無いのが実情です。

蝦夷地と松前地

蝦夷地では年貢（ねんぐ）と

しての米が取れないので、アイヌの人達との交易（物々交換）によつて得たものを商人に売つた利益や、商売で入港する船から関税を取りそれらの収入が藩の財政を支えていました。

松前藩ではアイヌとの交易を独占していたので、和人が勝手にアイヌとの交易をしたり、またアイヌとの紛争を避けたり

四〇〇年ほど前（一六〇六年）、

— 蝶夷地から北海道へ — 地方自治の移り変わり

きませんでした。

蝦夷地と松前地の境界は時代で変わりましたが、始めの頃は、東は沙泊から西はポンモシノ岬（熊石町）までで、後には亀田と熊石に番所を設けて取り締まるようになりました。

場所制度

このような所を「商場（あきないば）」と呼んでいましたが、後には「場所（ばしょ）」と呼ばれるようになりました。このような制度は場所制度と呼ばれ、松前藩だけの特殊なものでした。

最初の古平場所の知行主は誰であったのかは不明ですが、一七五〇年頃の文書によると新井田喜内という名前が見られます。

これらの場所は、明治になつて定められた「郡」とほぼ同じ地域で、古平場所はそのまま古平郡となりました。

場所の数は東・西海岸合わせて八五か所、松前地にも一〇か所ありました。所持といわれるものはいざれも藩の重臣達で、その交易を行

ためにも、アイヌの人達が自由に生活できる蝦夷地と松前地（和人地）を区別していました。アイヌの生活地域には藩の許可が無ければ出入りはもちろん、居住することも許されません。一方、松前地の方は和人だけで、今まで生活していたアイヌの外は居住することがで

松前藩では松前地だけでは知行（武士に与えられた土地や給料としての米）が足りないので、アイヌの生活地域には藩の許可が無ければ出入りはもちろん、居住することも許されません。家臣には知行の代わりとして、蝦夷地に往来してアイヌと交易する権利を与えました。

家臣らは、指定された自分の地域に決められた大きさの船を出して、アイヌの欲しがる品

う建物を運上屋と言います。下級武士には切米(きりまい)といつて、本州から運んで来た米を現物で給与されていました。

日本海航路

江戸幕府の体制が整つくると、松前藩は米がとれなかつたので石高はありますでしたが、大名として待遇されるようになります。そうなると藩の政事についても規模が大きくなり、それに伴つて財政も拡大してきました。その財源として、盛んになってきた日本海航路を利用して蝦夷地の市場を拡大することでした。

すでに名産として鰯・鮭・鱈・昆布・なまこ・干貝などがあり、また、港も整備されて城下である福山(松前)・江差・箱館は松前の三港といわれるほどの繁栄ぶりでした。

蝦夷地の産物が松前の城下に



近江商人の活動

集まる、商品を求めて本州方面からの商船が盛んに入港し、各地から商人達がやって来るようになりました。

松前藩も財政が苦しくなり、これらの商人達からしばしば多額の借金をしていました。商人達も藩に貸した金は全部返済されると考えていたが、これによって商売上の有利な条件を得られればそれで充分でした。

場所での交易についても、初めは知行主が自分達の手で行つていましたが、慣れないことでもあり、商人の力を借りなければならぬのが実態でした。

彼らは商業が盛んになると、仕込みといわれる方法で、まず、資金などの支援を受けなければ生活のできない出稼人に資金や商品を貸し与え、後から労力や産物でそれを返させました。

このようなことは藩や家臣に対しても同じであつて、いわば商人たちは金融業者も兼ねていたようなものでした。

ついで、「武士の商法」でうまくいかず、「モチはモチ屋」と言うよう、商人が一定の金を納めて場所を請け負わせる方法がとられるようになりました。これを場所請負制度といい、権利金として納める金のことを運上金(うんじょうきん)といいます。



↑旧下ヨイチ運上屋・林長左衛門が嘉永6年建設した運上屋を、時時の図をもとにして修復。国指定の重要文化財となっている。

美男美女伝説

吉川義雄

「おい、こんな言葉知ってるか。」
今は故人となつた渡辺裕文(茂)大先輩が真顔で私に尋ねた。
「あのなア、『積丹美人』に古平男」と言つて、古平には、男前が多いと言われているんだ。」「もちろん、私の知るところでなかつたが、私の反応が鈍いのにムキになつて、古平は越後衆が多いからとか、そこに秋田衆とか佐渡衆、能登衆が混ざつたから美男が多くなつたのだと、やたら強調した。

それなら、美女だつて多くなるはずと、少々反論すると、「うん、それだから美國には多いんだ」と、あくまでも古平は美女が多く、美國は美女が多いと強弁して止まない。

妙な話だが、現実を確かめたわけでもないし、男の自分にとつて悪い話でもないから、いい

「お、こんな言葉知ってるか。」
今は故人となつた渡辺裕文(茂)大先輩が真顔で私に尋ねた。
「あのなア、『積丹美人』に古平男」と言つて、古平には、男前が多いと言われているんだ。」「もちろん、私の知るところでなかつたが、私の反応が鈍いのにムキになつて、古平は越後衆が多いからとか、そこに秋田衆とか佐渡衆、能登衆が混ざつたから美男が多くなつたのだと、やたら強調した。

それなら、美女だつて多くなるはずと、少々反論すると、「うん、それだから美國には多いんだ」と、あくまでも古平は美女が多く、美國は美女が多いと強弁して止まない。

妙な話だが、現実を確かめたわけでもないし、男の自分にとつて悪い話でもないから、いい

加減のところで終わらせた。しかし、一度言われた言葉が妙に気になり出し、仲間に「知ってるか?」「知らない程に変化してくる。曰く、「『美國女』に古平男」「『古平女』に美國男」男に聞くのと女に聞くのとでは、判で押したようにアベコベになるし、少し広域にもなる積丹が消えて、美國と古平だけの問題にもなつていた。

積丹半島が、陸の孤島とも言われていた期間は長い。婚姻が狭い地域でばかり繰り返されば、良くも悪くも似たような人間が出来上がつてくるのは止むを得まい。

移動手段が、山越えの歩きか船しかない時代は去つて、自分の車で家の前から札幌までは、二時間もあれば充分移動できるようになつた。喧騒を極めた浜の賑いが去つて、ふるさと古平から次第に人の姿が減つてゆく。

戦後、海外引揚者や、その他

けだから、一応はそう認識したもの、詳細なんかはるか後々にわかつたこと。イトコにハトコ。さらにその婚姻関係の広がりに及んで、あきれたものだ。一家に五人から十人近い子づくりが普通の時代だから、その分だけ血縁も多いし、それらの婚姻によって生ずる「オヤコ」だけでも、数えるのに骨が折れる作業になる。

美國も似たような環境だから、人の移動範囲も狭くなるのは当然。優生学的にも似たような顔がたちになつたのだろう。ただし、美形が男女どちらかに片寄つたような表現は、多分に問題がある。

☆ ☆ ☆

戦後第一回の行政区画の見直しがあつた頃、余別村と入舸村は古平との合併を望んでいた。美國町と穩当に合併し、積丹町となつて落着した。

今また、全国的な行政改革の風が吹き、積丹町や余市町などをかつて冲合い百尋線で、仲良く合つた町のほか、仁木町や赤井川村など、果樹や農業の町村まで視野に入れた、大合併の話も進行していた。

古平と美國だけで美男美女を産出した時期は、もう遠い昔話になつたようだ。

両町の繁栄をそのままに、もつと他町村のよいものを導入しようとして、余市と古平を隔絶する山々をくり抜き、ようやく念願がかなつたとき、皮肉にもそこから美男も美女も流出した。

新しい歴史を作らねばなるま

の地域から古平に集まつた人々によって、人口は万をはるかに超えて賑つた。鮫が去つてもスケソウが大漁で、浜には活気が続いた。

教科書のいまむかし

◇外国人の見た日本の教育

幕末に来日したある外国人は、日本で見た次のようなことを本で紹介しています。

「江戸の町や店の中で、裸のキューピットが、これまで頑丈そうな父親の腕に抱かれているのを見かけるが、これはごくあたりよれた光景である。父親はこのような小さな荷物を抱いて、見るからになれた手つきで優しく器用にあやしながら、あちこち歩きまわっている。」

ここにいうキューピットというのは日本人にも人気のある人の形のことではなく、暑い時期だったのか、肌着一枚くらいで父親に抱かれている赤ん坊のことを言っているのです。ですが、大人がいつも子供といつしょに生活していることに驚いたのです。

日本ではよく普通の風景な

のですが、欧米のように親が外出するときには、子供がひとり家に残されるという生活習慣から見れば、確かにこのようなことは奇異に映つたことかも知れません。

欧米では夫婦単位の大人の生活が主ですから、子供はそこには入れない。大人中心の社会から疎外されることが多く、このような光景は欧米では見られないことだ、ということを言つてゐるわけです。

昔の日本では、いや戦後しばらくの間は、男も女も赤ん坊をあやしながら生活し働いていたというのが町の中で見られる風景でした。

子供は母親や年長の者の背中におんぶされていて、いつでも誰かの体温を感じ、匂いをかいで成長していたのです。

幕末の頃には、このような日

本の子供のしつけについて、海

◇勉強したいときに行く

江戸時代の中頃になると、一般的の家庭では寺子屋に通わせるということが普通になつてきました。親が勉強させる必要があると思つたら行かせ、必要がないと思つたら止める、といふことです。

幕末になると全国で数万（当時の人口が約三千四百万人）はあつたといわれていますから驚きます。ちなみに明治八年、全国の小学校数は二万四千三百三〇三校、平成二二年、一万四千一〇六校でほぼ同じです。



幼女必讀

女實語教全

東都書林 經訓堂梓



◇寺子屋の始まり

戦国時代の武将は、学問を習わせたいと思うと子供を寺に預け、寺子（てらこ）として一時期を過（すご）させました。これは将来の人材を育てるところとして、当時は学識のある僧侶が適任と考えられていました。

これが後に寺子屋の語源となりたわけです。

（寺子屋の始まり・続く）

（女実語教）孔子の教えの中にあらうべき言葉をやさしくそれを朗読できることによつて）した幼女用の教訓書

九月には各中隊の旺盛な意欲で陣地と軍道が完成し、中隊ごとに続々と気屯の兵舎に帰隊が始まった。大隊本部の炊事班も解散となり、私も中隊の幕舎に帰つて来た。二中隊も一部は氣屯へ帰つたが、私達は中村中隊長と残り、三角兵舎を完成してから帰ることになった。

毎日材料の運搬にあごを出したが、中隊長自ら、率先して私達といつしょになつて材料を担ぎ、黙々として坂を上り、部下と苦楽を共にしようとしている、人間、中村中隊長の真摯な姿に頭の下がる思いがした。

こんなこともあつた。私達の幕舎の近くに土方飯場があつた。飯場といつてもそれはタコ部屋である。そこで演芸があるから見に来てくれ、と説いた。

一日、作業を休んで、中隊長

以下全員が見に行つたが、相手はタコ部屋だ、監獄のようになつているのではないかと想像して行つたら、それはごく普通のバラック建ての建物だつた。

は鉄格子

ではなく、白樺の丸太

が打ちつけ

てあり、逃げられないようになつてゐるつもりらしい。

何しろ今日は、まさに前代未聞の樂団も見たし、めつたにお目にかかるないタコ部屋も見学

してしまつた。しかし、ご本人はまじめな顔をして、ドラムでもたたいているつもりらしい。油缶の上をほうきでザーザーとなでのには、思わず吹き出しあつた。しかし、ご本人はまじめな顔をして、ドラムでもたたいているつもりらしい。

理整頓され

ていた。

慰問に來

た芸人は二

四、五歳く

らいの女性

一人で、流

行歌もやれ

ば浪花節も

やるといつ

作業も順調に進み、帰りは軍

の洋服屋の細谷が実に詳しい。

驚いたのは、流行歌を歌うのには伴奏は石油缶とほうきだ。女

性が歌い出すとオッサンが、石油缶の上をほうきでザーザーと

なでのには、思わず吹き出しあつた。

中川教官の指揮で、二交替で吹くラッパの音は勇壮そのもの

で、ラッパは何と言つても軍隊の花形であろう。連日の練習の結果、仕上がりは上々で、あと

は当日の軍旗祭を待つばかりであつた。

そして、皆が待ち望んでいた軍旗祭の当日となつた。この日は、お祝として酒と紅白のまんじゅう、ご馳走の出る楽しみな日でもあつた。

全員が新品の軍服を着用し、完全武装で、各大隊ごとに続々と練兵場へ集合した。全員の整列が終わつたところへ、衛兵

に守られ、連隊旗手が奉持した軍旗が肅々と私達の前へ進んで

來た。

(続く)



作連

坂本甚衛

冷静、沈着とまではいかずとも、もう少しでーんと構えているタイプとばかり、私は、自分で自分を内省していた。

ある。この度、意外とそそつかしい人間であることに気付き、愕然、しょげ返るザマと相成つた。強いて言えば、からだがよたくたになるこの年まで気付かなかつたのだから、抜けているといえば抜けている。それもこれもみな、私のせつかちな性格からきているのだろう。

一月上旬のある日だった。その朝も腰椎牽引に通つてゐるエキサイ会診療所へ出かけた。徒步である。大体私宅から診療所までは徒步で約十分かかる。かつて体調を壊す前は、コレステ

ロールの上昇防止になると屁理屈をつけて、毎朝一時間半程度のウォーキングを行っていた。四、五年前、心臓に異変を生じ北大病院でアブレーションなる小手術を受けた。

その後主治医から、弱った心臓に負担がかかるから徒歩運動は二、三十分にすべしとの宣告を受けた。診療所への往復は略二十分前後で、丁度頃合いの距離といえる。履き慣れたスノーブーツから、外出用といえば大袈裟だが、少しばかり他所行きの長ぐつに履き替えた。何でだつたかは忘れた。恐らく夜に雪が降つたせいかも知れない。

牽引を終え、帰途信金のキャッシュコーナーへ回り道した。

幾許かのキャッシュを下ろし、海洋センター前の道を西の広場

ロールの上昇防止になると屁理屈をつけて、毎朝一時間半程度のウォーキングを行っていた。

四、五年前、心臓に異変を生じ北大病院でアブレーションなる小手術を受けた。

その後主治医から、弱った心臓に負担がかかるから徒歩運動は二、三十分にすべしとの宣告を受けた。診療所への往復は略二十分前後で、一度頃合いの距離といえる。履き慣れたスノーブーツから、外出用といえば大

袈裟だったが、少しばかり他所行きの長ぐつに履き替えた。何でだつたかは忘れた。恐らく夜に雪が降つたせいかも知れない。

牽引を終え、帰途信金のキヤツシュコーナーへ回り道した。

幾許かのキヤツシュを下ろし、
海洋センター前の道を西の広場

へ右折した時だった。突然、左足のズボン裾が長靴からはみ出し、靴の上部を覆つた。言うなればカウボーイの乗馬靴みたいなスタイルになつたわけであ

「俺の靴はどうなったんだ?」
聞くと受付の女性は、当方の
間違いに気付き、代わりの靴を
履いて行つた男性は知つてゐる
が、この診療所の近くじやない。
古平の駐在所近辺だ、と言
つたそうだ。

の部分がそんなに短いはずはないのだ。それでもまだ気付かず、自宅まで履いて帰った。他人の靴を履いたとの違和感は毛ほどもなかつた、帰宅後、上り框に腰を下ろし脱いだ靴を見た。違つてゐる。完全に他人様のものだ。ただ文数が同じなため、ぴつたり私の足にフィットしていくのだ。敷皮も違う。私の靴より丈はかなり短目で、新しさの程度はどちらもどつこいどつこいといえた。

早速、診療所へ電話した。待ち構えていたように受付の女性が言つた。

「すぐ持つて来て下さい。間違われた人はこちらで分かつてますから」

急いで妻に持つて行かせた。暫く経ち、帰宅した妻は依然持參

靴を履いたとの違和感は毛ほどもなかつた、帰宅後、上り框に腰を下ろし脱いだ靴を見た。違つてゐる。完全に他人様のものだ。ただ文数が同じなため、ぴつたり私の足にフィットしていだのだ。敷皮も違う。私の靴より丈はかなり短目で、新しさの程度はどちらもどつこいどつこいといえた。

度は私が片手に間違った長靴をぶら下げて行き取り替えて貰つた。結局何のかんのと一日近くを要した有様になる。

▽先月号から16ページに増ページをしてみました。デパートやスーパーも商戦には口論揃えが大事といいますから、せたかむいもバラエティーのあるものにして、幾分でも読者の要望にこたえたいもの、との願いからです。

▽「大きいことはいいことだ」か、どうかは別にしても、最近は大判の印刷物が目につきます。読みやすく、編集にも工夫や変化が見られます。せたかむいも、読みやすいようにA4判(古平町広報や週刊誌など)の大きさにしたいのですが、それだと紙折機が使えません。残念ですが出来ないことは仕方ありません。ほかに創意と工夫をこらしたいと考えております。

▽せたかむいも今月号で180号となりました。いつまで続くかなどは考えもしなかつたのですが、ここに来て、今後、発行する状況など変わることがあっても、あと少し、200号まで何とか発行したいものだ、と考える

ようになりました。200という数字には特別な意味もありませんが、先頃の新聞に「工藤投手が200勝達成！」と大きく出ていましたし、アメリカでは、イチロー選手が200本安打で話題になっています。また、北海道新聞では発行部数200万部を達成するキャンペーンを繰り広げるとか、こちらはちょっと桁が違うようですが、あと一年半余りで200号にゴールできそうですから、区切りのいいところで終わりたいもの、まあそんなところです。

▽しかし、問題は何といつても執筆者に人を得ることです。幸いなことに執筆の方々がいざねない大変好評で、ご高齢？の左も多めののですが揃ってお元気心強い限りです。新進？の左の見当もつけているのですが、ページ数のこともあり目下のところ思案中、しかし、思い切って増ページも考慮中ですが、これはちょっと無理かも……。

▽うれしいことのひとつは、ご覧になられた方からの反響です。つい先日は東京の中村幸子

さん(庭・築)、中学二年まで古平にお住まいでしたが、便箋五枚にわかつていろいろ感想やら何やら書いて送つてくれました。前に土平小学校教頭をされた余市で小学校長、退職後は余市町議もされた葛西庸三先生は、毎月のように感想を述べられ、余市郷土史会会長の前田先生はご助言や激励をくださいました。また、執筆された方のところへも、知己やときには見知らぬ方からのお手紙などもあるそうです。関心を寄せてくださることは誠にありがたいことです。

▽町内の方々からのご寄贈

- ・高橋健一さんは、文部省・小学校教科書2冊・穴掘機（通称みみかき）・石工用のみ、
- ・桜田提一さんは、20貫用さおばかり

ありがとうございます。

▽せたかむいは毎月600部印刷していますが、今月は『たらつり節全国大会』もありますので、宣伝を兼ね、気張って700部印刷しました。売れ残りのないよう精々販売努力もしてみるつもりです。

と聞いたら、北海道神宮例大祭でと答えテレビの下を指差した。見ると貼り紙がしてあり、帰りしなの玄関のガラス扉にも麗々しく書いてあつた。何たる間抜け、一事が万事、全てこの調子なのである。もつて生まれたこうしたドジな性格は、直そうと思つても仲々直るものでなく、意識の真底から沸々と滲み出してくるかのようである。

「すみません。今日はお休みです」と云つ。

者が四、五名いるのに、その日は一人もいない。私はソファに座り所持した文庫本を読み出した。文中に引き込まれていった時、不意に声がして婦長が立つていた。

この度、またも腰から左大腿
後ろにかけて痛み出し、五日前
から腰椎部に注射して貰つて
いた。その朝も八時過ぎ出かけ

← である。



古
里
歌

古平町岬短歌会

古
里
歌

古平俳句会

遠き日に師の作りませし鎮魂歌うたひみてをりゆく雲見つ

師の歌碑の移転建立の佳き日なり教へ子我ら斯く集ひ来ぬ

刻まれし歌碑の二首のなつかしもその頃われら若かりしかな

池 田 テ ル

堺町のなだりに広ごる灯火は線香花火を散らせるごとしあれほとの雜音もやうやく静まりて小樽最上町の夜は更けゆく

竹 内 コ ト

早朝の濃霧に対岸かき消えてにわかの深き山にあるごとしかるやかに舞ふ蝶みたりあいらしくしばし追ひゆく散歩の道に

堀 典 子

善光寺のしだれ桜は春風に香りのやさし心和ます

田 中 香 苗

老二人暮す野の家北窓を開けて若葉の風吹くを待つ

東 美 知

近付きし古里会の幹事より入院してゐるが中止はせぬと

鈴 木 時 子

娘と孫と曾孫來たり西瓜切る 斎藤波留
日の落ちてさざめき闇のキャンプ村 山口悦子

肅々と伝説秘める岩燕 越野敏雄

我的身に馴じみの深し单衣帶 大和田絵伊

古平の源流となる滝の音 福井幸平

師の句碑や海の暮色と草いきれ 高橋重子

夏霞積丹岳を宙吊りに 仲谷比呂古

島武意の神秘とロマン夏盛る 室谷弘子

夏霧の見なれし山を隠しけり 泉 清三

十勝野の刈取進む麦の秋 外山俊久

はまなすの路傍に咲きて潮の香も 渡辺嘉之

蝉時雨今を限りと声をはる 堀 典 子

岬とは風生むところ秋澄めり 越野清治

古平町史年表

昭和 8 年 (1933) ~ 続く

- ▲ 雪の始末について、雪は戸外に積まないで、道路は踏みつけるよう警察から指示が出される
- ▲ 新潟県人会が禪源寺で行われる。会費 30 錢
- ▲ 岩内～古平間の自動車道路建設のため、スキーで山越えをし調査が行われる
- ▲ スケソ漁の賃金が協定で、常雇い 1 か月 15 円と決まる
- ▲ スケソ大漁で、町内では 20 尾 10 錢で売られる
- ▲ 鯉が大漁で、岩内方面からも出稼ぎに来る
- ▲ 岩内方面も 5 千～6 千石の大漁となり、初漁の頃は 1 尾 2 錢だった鯉が 10 分の 1 の 2 厘に下落する
- ▲ 結核予防デーで町内を廻り、各戸にピラを配布する
- ▲ 古平町の素封家でもある①山口家が小樽市に転居する
- ▲ 同:鯉製品が 3 割から大暴落する一方、すけそが大漁で、年内に全漁期に匹敵する 8 万尾も水揚げしたところもある
- ▲ ②大謀でマグロ 1 千本余りの水揚げがあり、100 叻 (375 グラム) 2 錢で町売りされる
- ▲ 港町・恵比須神社祭当日、自転車競争が行われ、境内では素人芝居が上演される
- ▲ 古平小学校に併置された青年訓練所(後に青年学校)の入所式が行われる

昭和 9 年 (1934)

- ▲ 鯉合同漁業(株) 50 円株券が、鯉不漁のため 5 円に大暴落する
- ▲ 町政批判演説会(発起人・横山隆起)が古盛座で開かれ、大入り満員となる
- ▲ 市場から明太(メンタイ)製品が粗悪であるとの批判が出て、一時、古平産の製品の売れ行きが落ちる
- ▲ 稲倉石鉱山(株)が設立され、稻倉石鉱業所を移管する
- ▲ 皇太子殿下ご生誕を祝して建国祭と、郷土師団の出征壮行のため、在郷軍人分会や青年団・児童が参加してちょうちん行列が行われる

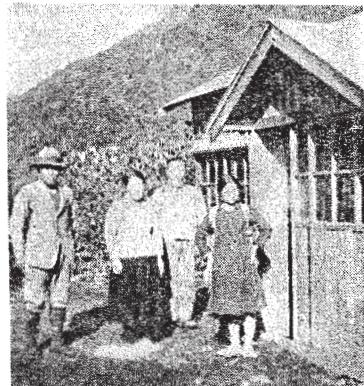


昭和三年一月

← 新潟県人会会則と会員名簿
会員数 132 名 (昭和 3 年)



→ 合同漁業株の株券
1 株 50 円 50 円 株券
同漁業株の褒賞旗高海鮭
トップの番屋に贈った



← 初代・石川所長が赴任した當時
のバラック建ての住宅兼事務所